

教宣 せぶん

45 × 4 = 180

訴訟中ではありますが、私たちの組織が有史以来、万一の時を考えて蓄えてきた「組合財産」のことを考えると「憤り」「怒り」を覚えます。現在、その財産は他労組に行ってしまうわけですが、社員制度が閉ざされようとしているいま、私たちの先輩や私たちが、後世の「契約係社員の組合員」のために貯めてきた、血と汗の結晶とも言える「財産」が、なぜ旧東海社や旧日勤社の内勤社員が組織する組合の金庫に眠ってしまわなければならないのでしょうか。どう考えても腑に落ちませんし、納得できません。代理店に転進する他労組の組合員からも同様の疑問や怒りの声をよく聞きます。

先輩たちや私たちは、全損保以外の、ましてや内勤社員のために、組合財産を残してきたのでは決してありません。他労組の金庫に入るまでの道筋を見た時に、ひとつひとつの曲がり角を曲がる「理屈」は一見通っているように見えますが、上空から全体像を眺めれば、その財産は常識では考えられない、普通ではありえない真反対の「金庫」に納められていくことがわかります。例えるなら45度の曲がり角を4回曲がって180度違う金庫に納められた構図です。最初のボタンのかけ違いが、さらなるボタンのかけ違いを生み、最終的には違う洋服の穴にボタンがかけられたという構図です。結局のところ、一見筋が通っていると思われた、ひとつひとつの曲がり角を曲がる「理屈」が、まともではなかったという証左です。最初から違う洋服の穴にボタンを通したら、だれもが「おかしい」「違う」と気がつくのに、一個ずつそして少しずつ「ツレ」たので、中にいる人たちは誰もそのことに気づかず、最終像に疑問を持ってその時は「自分には関係ない」という感覚なのでしょう。実に巧妙な手口です。

いま私たちのたたかいはその大半を本部財政に頼っています。カンパや自腹でのたたかひも余儀なくされています。こんな時に「財産」が使えたらと思いますし、本来こういう時のためにあの「財産」は蓄えられたはずです。もし「財産」に貯えた組織や人の目的が乗り移り、その目的以外に「財産」自身が使われることを拒むのであれば、私たちの「財産」は他労組の者が金庫を開けることを拒むでしょう。「財産」など使う必要のないところに「財産」が行き、本来使われなければならないところに「財産」がないというのはとても皮肉なことです。しかし、この皮肉な状況は偶然に生まれたのでしょうか？

考えてみれば、組合財産と同様の手口で、ケタが違う旧日勤社の「財産」も、旧東海社の金庫に眠っているのではないのでしょうか？こう考えていくと私たちの要求やたたかひが、いかに「ささやか」で、いかに「真っ当」で、いかに「正しい」か、あらためてよく見えてきます。